大決壊！
おもらしカノジョが
妊娠するまで

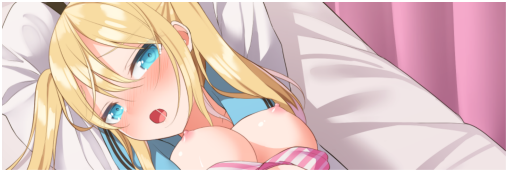
☆☆序章スバルという少女……P5

☆☆1章目
下校中のおもらし事件
……P12

☆☆2章目
見られながらなのに……、
気持ちいい？
……P45

☆☆3章目
全校朝会でうんちおもらし事件
……P102

☆☆4章目初体験は保健室で
……P134



☆☆5章目
おむつ交換はママで練習！
……P197

☆☆終章
男の子？　女の子？
……P243

むふふ……P255

☆☆1章目　下校中のおもらし事件

　いまの時代は、ここ数年で大きく変貌している。
　主に、男女の恋愛事情について。

　少子化が叫ばれて久しい近年、政府は大転換を図っていた。
　それは妊娠したカップルに多額の補助金を支給するというもの。
　その金額たるや、食べていくのに一生困らないほどに。

　だからなのだろう。
　かえって若いうちの……とりわけ、大和やスバルのような若い世代のうちでは告白＝結婚＝一生を添い遂げるというイメージが先行することになり、告白成功へのハードルはかえって上がっていた。

（こんなにこの髪の色が、目の色が珍しいのかしら？）

　放課後の廊下を早足で歩くスバルは、無遠慮に投げつけられる視線に、いつも

辟易とさせられていた。
　いつも言い寄ってくる男子たちは、スバルの身体が目当ての軽い男たちばかり。
　そんな男たちの言葉を真に受ければ、きっと近い将来傷ついてしまうのは目に見えていた。
　それに――。

（本当の私の姿を知ったら、みんな幻滅するに決まってるし）
　スバルには誰にもいえない秘密があった。
　それも、男子たちに知られたら幻滅されること間違い無しの、致命的な秘密――コンプレックスが。

「あっ」

　昇降口で外履きに履きかえるとき、スバルは短い声を漏らしてしまう。
　脱いだ上履きを拾い上げようとしてお腹が圧迫されて、

　じゅわわっ。

　クロッチの裏側が生温かく湿る感触。

　最後におしっこに行ったのは１時間前の休み時間のときだった。
　あれからほとんど水分は摂っていないけど、膀胱には漏れ出してしまうほどのおしっこが溜まっていたらしい。

（またチビッちゃうなんて……）

　ジュワッと生温かくなるショーツの感触に、しかしスバルは表情一つ変えずに靴に履きかえる。
　女の子は少しくらいショーツを汚してしまっても、平然としていないといけないのだ。

☆

　だけど、スバルの悩みはすぐにチビってしまう程度だけではなかった。

　極度の頻尿――。

　しかも、尿道が極度に緩いせいで、すぐに軽失禁してしまうのだ。
　どれくらい尿道が緩いのかというと、それこそ茹ですぎてふやけきったマカロニのように緩い。

　ちょっとでもくしゃみしたり、笑ったりしただけでもショーツを汚してしまうほどだ。
　更には走ったり、床にあるものを拾い上げようとしたときに膀胱が少しでも圧迫されれば漏らしてしまう。
　今日だって、プリントを後ろの席に座っている大和に渡すときにもジュワッとやってしまっていた。

（ぱんつ誰にも見せられないし）

　澄ました顔をしながら昇降口から校門へ。
　そんなスバルが穿いているショーツは、いつも黄ばんでいた。
　どんなに洗濯をしても、繊維の奥深くにまでおしっこが染みこんでしまって取れなくなっているのだ。

「はぁ……」

　校門を出て、家路を急ぐ。
　閑静な住宅街を歩くこと５分ほど。
　周りに人の気配がなくなったことを見計らうと、スバルは憂鬱げに大きなため息をついてしまった。

　たったそれだけで尿道から力が抜けて、

　じゅわり。

　クロッチの裏側が生温かく湿ってしまう。
　こんな調子で朝からスバルの軽失禁を受け止め続けてきたショーツは黄ばみを通り越して茶色く変色して湿っていた。
　おまたに食い込んでいたクロッチの裏側には、くっきりと茶色い縦染みが刻まれているに違いなかった。

「わたしなんて、すぐにおもらししちゃう、汚い女なのに」

　ポツリと、一言。
　その言葉は、誰にも聞かれることなく消えていく。
　きっと、今まで言い寄ってきた男子たちは、スバルがこんなにも赤ちゃんのようにおまたをおしっこ臭くさせていると知ったら、幻滅するに違いなかった。

（いつも黄ばんだショーツ穿いてる女だって知られたら……絶対に嫌われる

し……！）

　だから、スバルはいつも見えないバリアを張って、周囲と距離を置くことにしていた。
　何度も男子たちの告白を断ってきて、それでもまだたまに玉砕覚悟で言い寄ってくる男子たちもいるけど、最近では一人で静かに過ごすことができている。

「私なんかのどこがいいんだろ」

　ポツリと呟いた、その拍子に、

　……じゅわわっ。

　ちょっとでも気を抜くと、ショーツに生温かい染みを作ってしまう。
　靴を履きかえるときにもチビってしまったけど、最後にトイレに行ったのは１時間ほど前のことだ。
　ふやけたマカロニのようなスバルの尿道は、早くも限界を迎えようとしていた。

（あっ……、ちょっ……、まだ……っ）

じゅわっ、じゅわわっ。

　澄ました顔をしながら家路を急ぐスバルだけど、しかし限界はスバルが思っていた以上すぐそこにまで迫ってきているらしい。
　１歩進むたびに、ローファーから伝わってくる振動が膀胱を震わせる。

じゅわわっ、じゅもも……っ。

「あっ、まだ、ちょっ、ダメ……！」
　いまにもおまたを前抑えしそうになるけど、そんなに恥ずかしいことできるはずがなかった。
　人気がないとはいえ、ここは住宅街の一角なのだ。
　もしも一度前抑えなんかしたら、その手はトイレに駆け込むまで離すことができなくなるに違いない。

「まだ……、まだ、大丈夫……！」

キュンッ！　キュン！
じゅもも、じゅわわわわ……っ。

　おまたを無理やり引き締めるけど、勝

手に痙攣して言うことを聞いてくれない。
　軽く絶頂しているかのようにおまたが痙攣すると、その合間を縫っておしっこが漏れ出してきてしまう。
　クロッチの裏側に、取り返しのつかないぬくもりが広がっていく。

「うぅ……、おしっこが、勝手に……あぁ……っ」

　たらり……、

　内股を生温かい指先でくすぐられているかのような感覚。
　クロッチから滲み出してきたおしっこが、ついに内股を伝い落ちてきてしまったのだ。

「ダメ！」

　ぎゅっ。
　ついにスバルは、少女としての禁忌を犯してしまう。
　両手でおまたを抑えて、尿道を無理やり塞ぐ行為――前抑え。

　それは少女のあまりにも屈辱的なポーズ。
　それでもおしっこを止められるわけではない。

「あっ、あっ、染み出してきちゃ……いやぁ……っ」

　じゅわっ、じゅもももっ。

　スカートの上から前抑えしているから、股間から滲み出してきた恥水が、ショーツを、スカートへと染みこんでくる。
　きっとスカートの股間の部分には、おしっこの恥ずかしい染みができているに違いない。
　もう、残されている時間は限りなく少ないようだ。
　だが家まではまだ歩いて２０分はかかる。その途中には、公衆トイレはおろか、公園の茂みさえもない。

（もう、我慢できない……っ）

　じゅももっ、じわわっ。

　前抑えしている指の隙間から、おしっこが滲みだしてくる。
　もう、決壊はすぐそこにまで迫ってきていた。
「まっ、まだぁ……、だめぇ……っ」

　じゅわわっ、ちょろろ……。

　よろめきながらも、なんとか閑静な住宅街の路地を急ぐ。
　だけど女体はスバルの意思とは無関係に尿意に屈しようとしていた。

　ぽたり、ぽたた……、
　溢れ出してきたおしっこが雫となって落ち、乾いたアスファルトに散っていく。
　それはまるでスバルの足跡のように。
　家までのあと２０分など、耐えられるはずがなかった。

「も、もう、こうなったら……っ」

　スバルは周囲を一瞥する。
　そんなスバルの視点が、ある一点で止まった。
　その先にあったのは、よほど意識しな

ければ見逃してしまいそうな、細い路地への入り口だった。

　あそこなら――、
　想像しただけで、フッと尿道から力が抜けてしまって、

　じょわわっ。

　抑えつけているおまたから、大量のおしっこが溢れ出してきて、黄金水がだらだらと流れ落ちていく。
　もう、迷っている暇はなかった。
　スバルは今にも噴きだしてしまいそうになるおしっこを堪えながら、なんとか小股で路地へと辿り着く。
　そこは、影になったほとんど人が通らないような細い路地。

「こ、ここで……。こんなところで、楽になってしまうなんて」

　まだおもらしはしてないけど、スバルの心はすでに折れていた。
　この両手を離して、楽になるしかない、と。
　いまにも破裂しそうな膀胱では、もう

ここでおもらしするしか道は残されていない、と。

「あっ、ああぁー……」

　気が抜けるような、熱い吐息。
　それとともに、少しずつおまたを前抑えしている両手から力が抜けていく。

　じゅわわっ、じゅもももも……。

　尿意を我慢するあまり、キュンキュンと痙攣している尿道からおしっこが漏れ出してくる。
　前抑えしている両手から黄金水が溢れ出してきて、ぽたぽたと地面へと落ちていく。
　内股にも黄金の滝ができあがり、膝小僧を、ふくらはぎを流れ落ちていき――、

「だめっ」

　ローファーにおしっこが溜まろうかというその瞬間、スバルは地面に膝をついてしまう。
　こうしなければ靴下やローファーをお

しっこでぐしょ濡れにさせてしまうのだから、仕方がないが……、
　しかしそれはここからもう動けないことを意味する。
　もう、ここで尿意に屈するより他ないのだ。

「ああぁ……っ。いやぁ……っ、ぱんつのなか、あったかくなっちゃって……ううっ」

　じゅもももももももももも……。

　くぐもった水音。
　前抑えしている両手の隙間から、黄金水のせせらぎが湧き出してくる。
　止めどなく、止めどなく……。

「あっ。あっ。あっ。あっ。あっ」

　しゅわわわわわわわわわわ……。

　引き攣った声を上げてしまう。
　パクパクと口を開けて。
　それはまるで酸欠になった金魚のように。

（お願い、早く、終わって……！）

しゅいいいいいいいいいいいい……。

終わって。
漏らしながら、たしかにスバルはそう願った。
――止まって、ではなく。
もはや、スバルはおしっこを我慢することを、心のどこかで放棄していたのかもしれない。
すべて出し切って楽になってしまおう、と。

「ふぁ……、ふぁぁぁ……」

じょぼぼぼぼぼほぼぼぼぼぼ……。
もわ……。
もわわ……。

内股を伝い落ちるおしっこが地面に広がり、ツーンとしたアンモニア臭の湯気が上がる。
それはまるで失禁してしまったスバルのことを責め立てているかのようでもある。

「うう……っ、いっぱい……出てくるよぉ……っ」

じょわわわわわわわわわ……。

　ショーツも、スカートもビタビタに濡らしながら、スバルのおもらしはいつまでも続く。
　地面にはスバルを中心として恥ずかしすぎる水溜まりが広がり、狭い路地はアンモニア臭に蒸れ返る。

（もしもこんなところを誰かに見られたら……ううっ、恥ずかしすぎるよ……！）

しゅいいいいいいいいいい……。

　いつしか前抑えしている両手からは完全に力が抜けていた。
　我慢すれば、それだけおもらしの時間が長くなる。
　それなら少しでも早くおしっこを出しきったほうがいいじゃないか。
　スバルの心は、もうすでに折れきっていたのだ。

「ふっ、ふぅ……っ」

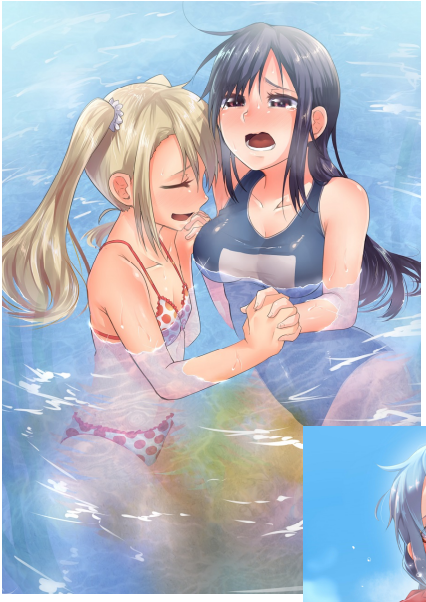
しゅわわわわわわわわわわ……。

スバルはショーツを穿いたままだというのに、お腹に力を入れていた。
それだけおしっこが勢いを増し、おしっこの滝は瀑布となって地面に散っていく。
それでもスバルのおもらしは終わることなく――、
いつまでも続くのだった。

ここまで読んでくれて、
ありがとうございます！
体験版はここまでです！

☆次のページからは、
大決壊シリーズのイラストの一部を掲載しておきますので、お楽しみ下さい！

♪大決壊シリーズ配信中♪



小早川
まとろ